

高木 麻衣さん

(南丹市立園部中学校三年)



京都府知事賞

「夏ごとに、5年間研究を重ねてきたこと」

「夏ごとに、5年間 研究を重ねてきたこと」

園部中学校三年 高木麻衣

それは四年生の夏から始まりました。おばあちゃんの家近くの神社で、夏の夕暮れに、その「動く空蟬」を見つけたのが最初でした。何か小さな動くものが視界に映りました。目を凝らしてよく見てみると動く空蟬でした。

それまで私は、木の幹や葉っぱの裏側にくっついていいる「ぬけがら」しか見たことが

ありませんでした。そのセミは、あと数時間後に起こる、たった数分の美しい瞬間を待っているかのように目をキラキラさせていました。それなのに私はそのセミを成虫にしてあげることができませんでした。私は家で羽化を見たい気持ちだけで連れて帰ってしまい、羽化できない状態になっています。こうなってしまうのはセミが羽化するための環境の条件をそろえてあげられなかったからです。

そのひとつに「足場」の固定に問題がありました。ふたつめの問題は羽化するために固定する足場の角度でした。

私は、家でこの二つの条件を満たしてあげることができなかったのです。

でも悲しい思い出ばかりではありません。六年生の夏には、家の裏庭で生まれて初めて羽化をじっくり見ることができました。その姿は、夕暮れの光に染まりながら、ゆっくりと不思議な黄緑色の羽を伸ばして立派な成虫となって

いきました。やっぱりセミは環境がそろった自然の中で、自分の力で生きていくことが一番だということを、実感しました。

しかし私は最近、年々セミの鳴き声が減ってきているような気がします。セミは成虫になるまでに七年間、土の中で過ごします。土の中で生活している間に地上ではセミの居場所を奪うような環境破壊がどんどん進んでいます。

コンクリートで固められた都会では、その下で地上に出ることができないセミがたくさんいます。また、地上に出られたとしても、人間たちが新しい道をつくったり、あらゆるものの原料として使用するために次々と木を伐採していくので、羽化するための幹や葉っぱがありません。

森林が減ると二酸化炭素が増え、このごろは地球温暖化によって気温が上がり、昭和五十年ごろには、九州・四国地方でしか見られなかったクマゼミが、今では日本全体の気温の上昇によって、近畿・

関東地方でも見られるようになります。セミに異変が起きていくようです。

私はセミたちが「暑いよ。苦しいよ」と鳴きながら北の方へ向かっているように思います。

今の社会は、欲望や利便さだけを求めて、どんどん進歩してきましたが、本当に大切なことを忘れていると思えます。毎日が、時間に追われて心も身体もゆとりのない生活の中で、ちょっとひととき、自然の中で腰を下ろしてみてください。そして目を閉じて耳をすましてみてください。いろんな虫の音が聞こえると思います。この虫たちの声がいつまでも絶えることなく、世界中の人々の心に響きますように。

そして、少しでも多くの人が自然に目を向け、ゆっくり進んでいく穏やかな日々を過ごせますように。私が大人になってもセミの元気な声が聞こえてきますように、と願います。